

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	20221009	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	癌における転写制御変異の統合的解析	研究代表者 (所属・職)	油谷 浩幸（東京大学・先端科学技術研究センター・教授）

【平成23年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、解析機を駆使して「転写領域を新たに同定する」「転写領域の状態および転写の状態を記述する」「統合して癌における転写調節の変異を統合解析する」の3段階を目的とする研究である。

既に45報におよぶ成果報告を行っており、それぞれ一定水準以上の解析分析であり研究活動は活発である。特に肝がんゲノムのシーケンシングでは本研究の目的自体ではないが興味あるデータを国際コンソーシアムで公表している点は評価に値する。また多くの共同研究による基礎癌研究の近代化機械化という点でも十分に貢献している。

一方その45報の成果報告では肝がん以外に胃がん、大腸がん、子宮内膜癌、骨肉種、乳がん、肺がん、グリオーマ、など多くの癌と、脂肪細胞、メガカリオサイト、骨芽細胞、ES細胞などの発生分化過程からアスペルギルス（カビ）までが「解析」の対象とされその解析手法もさまざまに統一が見られない。なぜそれぞれが必要なのか、今後それぞれの解析が相互に補い合いどのように「統合解析」と「理解」に向かうのかについて説明するべきである。

【平成25年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果どおりの研究成果が達成された。
A	具体的には、肝がんを始めとする多種のヒトがんのゲノム解析を通じて、その変異と遺伝子の転写との関係を解析し、その成果を多くの影響力のある国際誌に発表している。また、国際コンソーシアムの一員として、国内のがんゲノム研究の発信にも大きく貢献していることも高く評価出来る。今後は、研究進捗評価結果でも指摘されているように、これらの知見を統合して、がんの発生・進展とゲノム機能異常との関係の解明を進め、がんの予防や治療への道を切り開く成果を発信してもらいたい。